

群馬県蚕糸振興計画 (案)

令和8年3月

群馬県農政部

目 次

1 本県の蚕糸・絹業	・ ・ ・ 1
(1) 絹産業の歴史	
(2) 世界遺産「富岡製糸場と絹遺産群」	
(3) 蚕糸業の現状（R 6）	
2 策定の考え方	・ ・ ・ 2
(1) 趣旨	
(2) 位置付け	
(3) 性格	
(4) 期間	
(5) 基本目標	
3 蚕糸振興の施策	・ ・ ・ 3
取組方向 1 多様な養蚕の担い手確保と定着支援	・ ・ ・ 3
取組方向 2 県産優良繭の生産安定	・ ・ ・ 5
取組方向 3 製糸業の基盤強化	・ ・ ・ 7
取組方向 4 付加価値の高い蚕糸業の創出	・ ・ ・ 9
取組方向 5 蚕糸業を支える試験研究	・ ・ 1 1
取組方向 6 蚕糸絹業の交流と情報発信	・ ・ 1 3

1 本県の蚕糸絹業^{けんぎょう}

(1) 絹産業の歴史

絹の歴史は今から 5000 年以上昔の中国に始まり、日本には紀元前後に養蚕・製糸技術が伝わったとされています。本県では、8 世紀の中頃に新田郡（現在の太田市）から貢納された絹が正倉院に残されていることなどから、この頃には特産品として絹が生産されていたと考えられ、18 世紀には繭・生糸の一大産地となっていました。

その後、1909 年には日本が世界一の生糸輸出国になり、蚕糸絹業は明治から昭和初期にかけて生糸の生産や輸出を通じて、日本の近代化と経済発展に大きく寄与するとともに、地域経済や文化の形成に大きな役割を果たしてきました。

現在は、海外の安い生糸や絹製品の輸入の増大、社会構造の変化による絹需要の減少等により、蚕糸絹業の規模は縮小していますが、日本で開発された養蚕・製糸技術は、今日でも世界の絹産業を支えています。

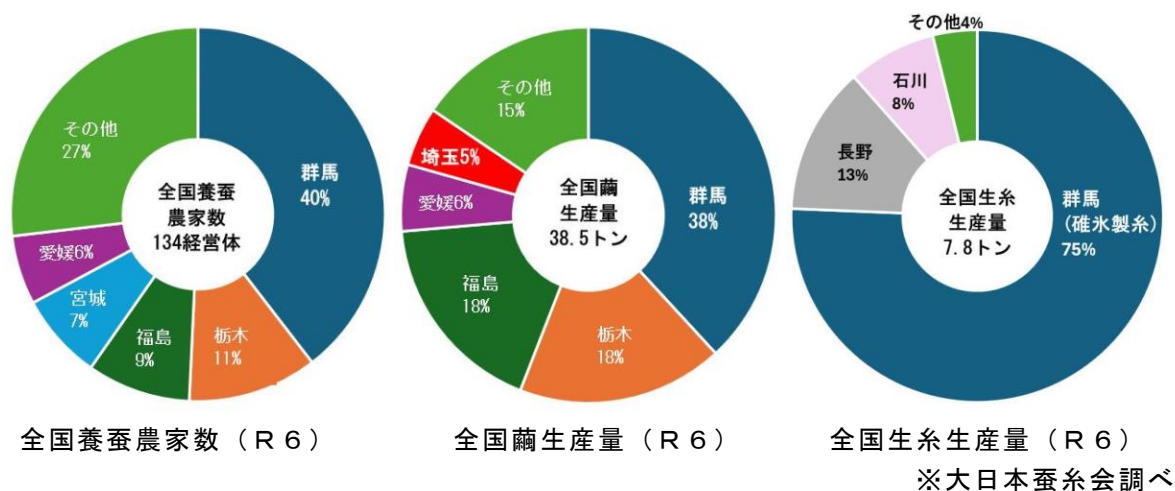
(2) 世界遺産「富岡製糸場と絹遺産群」

富岡製糸場など 4 資産^{※1}で構成される「富岡製糸場と絹遺産群」は、高品質な生糸の大量生産を実現した「技術革新」と、世界と日本との間の「技術交流」を主題とした近代の絹産業に関する遺産であり、平成 26 年 6 月に世界遺産に登録されました。

この世界遺産登録を契機に、蚕糸業に対する関心が高まり、新規参入の相談が増加しました。本県では、伝統ある蚕糸業を継承することが世界遺産の文化的価値に厚みを増すこと、蚕種^{さんしゅ}^{※2}製造から絹製品に至るまで、各生産段階において、地場産業としていることから、関係機関が一体となって、養蚕担い手の確保・育成対策に取り組んでいるところです。

(3) 蚕糸業の現状（R6）

本県は、養蚕農家数、繭生産量、生糸生産量いずれも日本一を誇っています。



※1 富岡製糸場（富岡市）、田島弥平旧宅（伊勢崎市）、高山社跡（藤岡市）、荒船風穴（下仁田町）の 4 件

※2 蚕の卵

2 策定の考え方

(1) 趣旨

日本の近代化に貢献してきた本県の蚕糸業は、世界遺産である「富岡製糸場と絹産業遺産群」を生み出した原点とも言うべき、歴史と文化を象徴する重要な産業です。

本県の養蚕農家数、繭生産量及び生糸生産量は日本一を誇り、都道府県では唯一の研究機関である群馬県蚕糸技術センター（以下「蚕糸技術センター」）による蚕種製造や稚蚕※¹人工飼料製造を始めとした蚕糸業への各種支援が行われています。

蚕種製造や稚蚕共同飼育所※²の減少等、蚕糸業の基盤が脆弱化している中、蚕種業、養蚕業、製糸業について、県内外の関係者が協力して、強化を図ることで、将来にわたって日本の蚕糸業を維持・発展させていくことが重要です。

そこで、県では、今後の蚕糸振興の施策や方向を明示することで、関係者が蚕糸振興を行う指針となるよう、本計画を策定しました。

(2) 位置付け

本計画は、群馬県の農業分野における最上位計画である「群馬県農業農村振興計画」の蚕糸振興に関する「部門計画」として位置付けるものです。

群馬県蚕糸業の10年先を見据えて、計画期間における施策の方向性や目標を示す蚕糸振興の基本指針とします。

(3) 期間

令和12年度を目標年度とし、令和8年度を初年度とする5カ年計画（令和8年度～令和12年度）とします。

(4) 基本目標

「ぐんま」が支える日本の蚕糸業

本県は、全国繭生産量の約4割、全国生糸生産量の約7割を占めており、日本で最も蚕糸業の盛んな県です。

国内蚕糸業の基盤が脆弱化する中、本県蚕糸業の維持・発展のため、本県の関係者はもとより、国内他産地とも連携した取組を実施していきます。

※¹ 1～5齢までの蚕の成育段階のうち1～3齢の蚕。ちなみに4～5齢は壮蚕

※² 稚蚕を飼育し各農家へ出荷します。群馬県では富岡市の小野稚蚕人工飼料育センター1カ所です。

3 蚕糸振興の施策

取組方向 1 多様な養蚕の担い手確保と定着支援

〈現状と課題〉

令和6年の養蚕農家数は55経営体（前年比4経営体減）となり、5年前と比較して47経営体減少しています。

本県では、平成26年の「富岡製糸場と絹遺産群」の世界遺産登録を契機に養蚕参入に関する相談が増加しました。そこで、平成28年から蚕糸技術センターで技術習得のための「ぐんま養蚕学校」を開講し、新規参入者の育成を行ってきました。その結果、令和6年までに35経営体※¹が新規参入しました。このうち、養蚕を継続しているのは21経営体で、養蚕農家全体の38%を占めています。「ぐんま養蚕学校」の開講により、新規参入者が一定数確保できたものの、高齢化や後継者不足による農家数の減少を補完しきれておらず、参入後、既に廃業した農家もあり、さらに多くの新規参入者を確保し、養蚕農家として定着できるよう、取組を強化することが重要です。

今後、移住者や企業の養蚕参入など、多様な担い手を確保するため、群馬県と就農先の市町村、JA等が連携し、技術習得を柱に桑園の斡旋、養蚕施設・資材等に対する補助等、新規参入者ごとの課題に対応した支援を経営が軌道に乗るまで行う必要があります。

年度別養蚕農家数と新規参入者の状況

単位：経営体

年度	H26	H27	H28	H29	H30	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6
県全体の養蚕農家 （繭生産者）数	143	137	125	121	111	102	86	72	62	59	55
新規参入者数 当年計	1	3	5	9	3	2	2	2	3	3	2
新規参入者数 累計	1	4	9	18	21	23	25	27	30	33	35
うち当年の養蚕 農家（繭生産者）	1	4	9	15	19	20	21	19	19	22	21
県全体に 占める割合	1%	3%	7%	12%	17%	20%	24%	26%	31%	37%	38%

〈取組内容〉

- ① 「ぐんま養蚕学校」の研修生を確保するため、SNS等での情報発信を強化します。
- ② 「ぐんま養蚕学校」は、オンライン研修の導入や経験豊富な養蚕農家が技術支援するメンター制度等、柔軟できめ細かな研修、サポート体制を整えます。
- ③ 資材や桑園造成等の経費を補助することで、養蚕への新規参入や規模拡大を支援します。
- ④ 新規参入者向けに、製造中止で入手困難となった養蚕資材のリユースを進めます。



「ぐんま養蚕学校」桑採りの研修



「ぐんま養蚕学校」飼育管理の研修

〈指標〉

目標指標	単位	R 6 年基準年度	R12 年目標年度
養蚕経営体数	経営体	55	55
新規参入者数 (R 6 年からの累計)	経営体	2	20

※¹ 本計画では農業経営体として、個人や世帯で養蚕を行う農業者に加え、法人化して養蚕を行う農業法人や株式会社等をカウントしています。

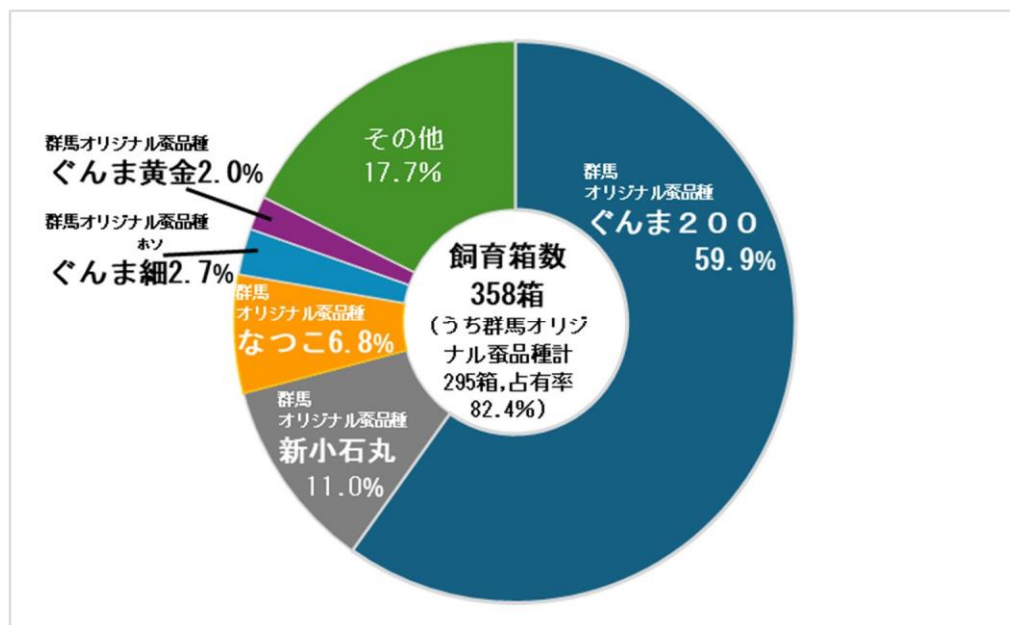
取組方向２ 県産優良繭の生産安定

〈現状と課題〉

令和６年の繭生産量は、高齢化等による養蚕農家の減少に加え、記録的な猛暑による作柄不良や晩秋蚕期※¹に蚕病※²が多発したことにより、15.1トン（前年比80.1%）となりました。今後も地球温暖化は進展する可能性が高いため、気候変動に対応した対策を強化する必要があります。

また、外国産と差別化した付加価値の高い県産優良繭・生糸の生産安定を目的として、蚕糸技術センターでは、糸の太さや生糸の染色性等に特徴のある「群馬オリジナル蚕品種」を育成して蚕種を供給し、県内外の養蚕農家で飼育されています。現在９品種が育成され、令和６年の県内における蚕飼育量の占有率は82.4%となっています。養蚕農家の要望に応えるため、暑さに強い蚕として育成された「なつこ」は、令和２年より養蚕農家の実用生産が始まりました。令和６年の占有率は6.8%となっており、気候変動に対応した蚕品種として、今後の飼育量拡大が期待されます。

なお、養蚕農家の経営安定対策としては、繭の代金（以下「繭代」）について、一般財団法人大日本蚕糸会※³（以下「大日本蚕糸会」）の助成事業を活用した繭代助成が行われています。これに加えて、群馬県では、県と市町村が協調して繭代の上乗せ助成を実施することで、県内繭生産量の維持を図っています。



蚕の品種別飼育状況（R6）

〈取組内容〉

- ① 猛暑対策として、暑さに強い群馬オリジナル蚕品種「なつこ」の飼育期間を、現在の初秋蚕期※¹に加え、夏蚕期、晩秋蚕期へと拡大していきます。
- ② 養蚕農家に対して、清潔な環境で飼育する防疫管理の徹底と薬剤による蚕病防除技術を推進します。
- ③ 温暖化に伴い、桑の生育期間が延長しており、初冬蚕期の飼育を推進することで、繭生産量の増加を図ります。
- ④ 繭価格は、生産費を下回っている状況が続いているため、県等の繭代助成により、養蚕農家の経営を支援することで、繭生産量の増加を図ります。



群馬オリジナル蚕品種「なつこ」



D-DAC 消石灰液による蚕室消毒

〈指標〉

目標指標	単位	R 6 年基準年度	R 12 年目標年度
県産繭生産量	トン	15.1	22
群馬オリジナル蚕品種 「なつこ」占有率	%	6.8	25
【蚕糸技術センター】 生産技術指導回数	回	62	100

※¹ 蚕を飼育する時期。群馬県では早い順に春蚕期→夏蚕期→初秋蚕期→晩秋蚕期→初冬（晩々秋）蚕期に区分

※² 蚕に起こる疾病の総称。伝染性がある感染症は、大量に蚕が死滅する恐れがあります。

※³ 前身は明治 25 年創立の大日本蠶絲會。変遷を経て平成 26 年に一般財団法人へ移行登記。蚕糸絹に関する科学技術の振興と蚕糸・絹業の改良発達を図り、蚕糸絹に関する社会文化の向上発展に寄与することを目的として、各種事業を実施しています。

取組方向3 製糸業の基盤強化

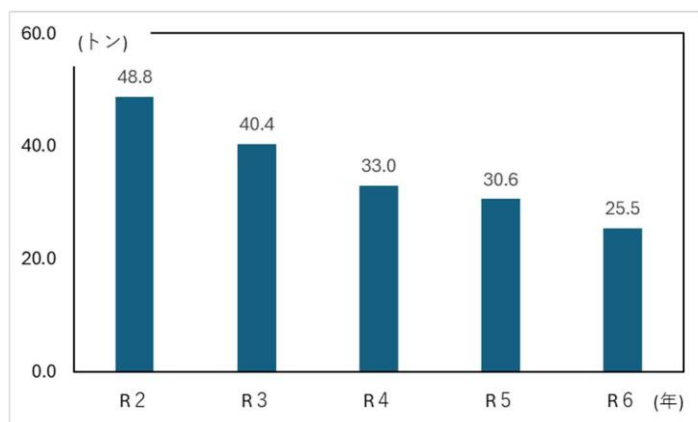
〈現状と課題〉

本県の製糸工場は、現在、碓氷製糸株式会社（以下「碓氷製糸」）1工場のみとなっています。昭和34年の創業以来、碓氷製糸農業協同組合として製糸専門の事業を行ってきましたが、平成29年5月、本県蚕糸業の維持継承を図るとともに全国の繭を取り扱える組織とするため、株式会社に組織変更しました。本県を始め9県から繭を収納し、全国の生糸生産の75%を占めるなど、我が国の蚕糸業の基幹となる工場となっています。

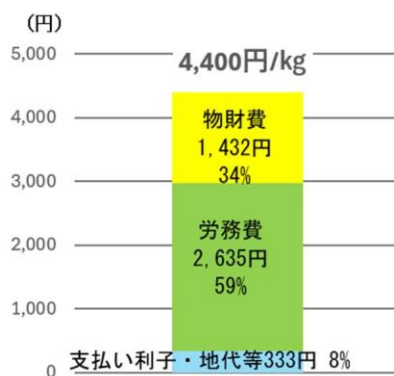
碓氷製糸の令和6年の繭収納量は、養蚕農家の繭生産量の減少が影響し、25.5トン（前年比83%）となりました。繭収納量を安定的に確保するためには、繭生産量の減少を食い止めて、増加させる必要があります。減少の一因として、養蚕農家の繭生産費4,400円/kgに対し、上繭^{じょうけん}※1買取価格が2,665円/kg^{※2}（令和6年提携グループ^{※3}の加重平均、大日本蚕糸会調べ）と下回っていることがあげられます。そこで、碓氷製糸においても、繭生産費を上回る繭価格で養蚕農家と取引できるよう、生糸の販売強化を図るとともに、新商品の開発や多様な絹製品の販売促進に取り組んでいく必要があります。

また、碓氷製糸の施設、機械は老朽化しているため、工場の安定的な稼働にも影響する可能性があります。令和5年度には、製糸工場光熱費高騰対策支援事業による助成を活用し、電力費の高騰対策として、高圧電源装置等の更新・改修を行いました。この他の施設や機械も更新・改修が必要な状況です。

さらに、製糸工場において、生糸製造管理、養蚕指導等の業務を行っている技術者が高齢化していく中で、製糸業を維持するには技術を継承する人材の確保・育成も課題です。



碓氷製糸繭収納量の推移



上繭1kgあたりの生産費(令和6年)

※大日本蚕糸会試算

〈取組内容〉

- ① 高品質な生糸生産を継続するため、各種助成事業を活用した計画的な施設整備を支援します。
- ② 生産コストを適切に反映した繭価格と生糸価格が実現するよう、販売強化の取組を支援します。
- ③ 絹製品の企画・販売、観光蚕糸業も掲げ、多角的な経営展開が図れるように支援します。
- ④ 製糸技術者の育成は、製糸工場における技術継承を主体に、安中市、大日本蚕糸会蚕糸科学技術研究所^{※4}（以下「蚕糸科学技術研究所」）等の関係機関と連携して支援します。



碓氷製糸の生糸製造



碓氷製糸の生糸

〈指標〉

目標指標	単位	R 6 年基準年度	R12 年目標年度
碓氷製糸の繭収納量	トン	25.5	30

※1 製糸原料として合格した繭

※2 群馬県では、上繭買取価格に加え、県、市町村による繭代補助を実施しています。

※3 国産生糸の希少性を生かし、それに絹業側の染・織・デザインの力を加えて、品質の高い差別化された絹製品を作り、それによって実現された高い価格を各生産段階に還元することを目的として、農林水産省等の支援により、蚕糸業（養蚕農家、製糸工場）と絹業（織物等）が参加し、結成されたグループ

※4 蚕糸絹分野の研究・技術開発を進めると同時に、蚕種製造、繭質・生糸検査、養蚕農家に対する技術指導等の業務を実施しています。

取組方向 4 付加価値の高い蚕糸業の創出

〈現状と課題〉

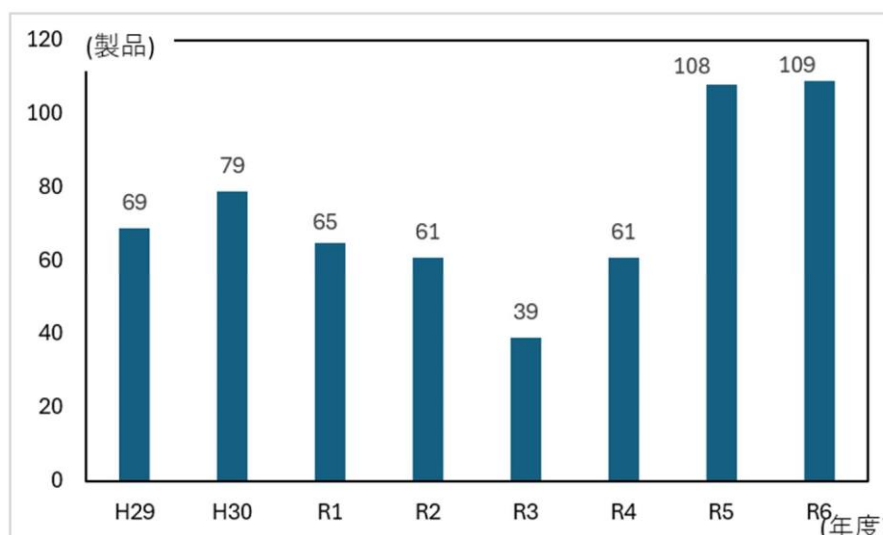
生糸や絹製品の販売は、安価な外国産の輸入により、令和6年の国内絹需要に占める国内生糸のシェアは0.13%となり、苦戦を強いられています。そこで、群馬県では、外国産との差別化を図るため、群馬オリジナル蚕品種を養蚕農家に供給するとともに、平成11年度からそれらを原料とした生糸・絹製品を「ぐんまシルク」に認定することで、ブランド化及び生産・販売の拡大を推進しています。令和6年度は109製品（16企業）を認定し、各企業が「ぐんまシルク」ロゴマークのシールを商品に貼付するなどして、絹製品の販売に活用されています。

また、群馬県蚕糸技術センターでは、付加価値を高めるため、GMカイコ^{※1}を活用した高機能シルク（高染色性シルク、蛍光シルク等）や有用物質（検査薬原料、化粧品原料等）の生産について、国や民間企業と共同研究を進めています。なお、GMカイコの飼育については、カルタヘナ法^{※2}に基づき国の承認を受ける必要があります。

国内絹需要と国内生糸生産量の状況

年	H2	H7	H12	H17	H22	H27	R2	R3	R4	R5	R6
国内需要量（トン）【A】	16,620	21,960	14,820	14,580	9,960	9,563	6,612	6,359	6,360	6,060	6,120
国内生糸生産量（トン）【B】	5,622	3,146	559	150	53	23	12	10	10	9	8
国内生糸のシェア【B/A】	33.83%	14.33%	3.77%	1.03%	0.53%	0.24%	0.18%	0.16%	0.16%	0.15%	0.13%

※大日本蚕糸会調べ



「ぐんまシルク」認定製品数の推移

〈取組内容〉

- ① 「ぐんまシルク」の認定製品を増やすとともに、それらのブランド化やPRを支援し、県産シルクの需要喚起を図ります。
- ② 生糸に限らない新しい用途開発等、新規連携企業の実組について、共同研究により支援します。
- ③ 養蚕農家がGMカイコを飼育できるよう、大臣承認に向けた生産体制の確立を支援します。



「ぐんまシルク」新ロゴマーク
(令和7年10月～)



GMカイコ（GFP^{※3}ぐんま200）の繭

〈指標〉

目標指標	単位	R6年基準年度	R12年目標年度
ぐんまシルク認定製品	製品数	109	120
【蚕糸技術センター】 共同研究での新規連携企業 (R8年からの累計)	企業数	2	5

※¹ 遺伝子組換えカイコのこと。英語では「Genetically Modified Silkworms」、その頭文字を取り「GMカイコ」

※² 遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物多様性の確保に関する法律。この法律で遺伝子組換え生物等の使用による、生物の多様性へ悪影響が及ぶことを防ぐため、規制措置等を講じています。

※³ 緑色の蛍光タンパク質を発現する蚕、英語で「Green Fluorescent Protein」、その頭文字を取り「GFP」

取組方向5 蚕糸業を支える試験研究

〈現状と課題〉

蚕糸技術センターは、都道府県の公設では唯一の蚕糸専門の試験研究機関として、繭の増産や高付加価値化に資する技術を中心に課題化し、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、蚕糸科学技術研究所等の研究機関や民間企業とも連携しつつ、研究に取り組んでいます。特に令和6年からは、新たな課題として有機桑園を造成し、有機養蚕技術体系の確立を目指した研究も始めています。今後も蚕糸業の振興を図るため、養蚕の生産現場や製糸・生糸の実需者のニーズを重視した研究を行っていく必要があります。

このほか、蚕糸技術センターでは、群馬オリジナル蚕品種の卵製造や稚蚕人工飼料「くわのはな^{※1}」の製造・供給、「ぐんま養蚕学校」による担い手の育成、養蚕農家の技術指導、稚蚕共同飼育所の飼育指導等、蚕糸業で欠かすことのできない多岐にわたる業務にも取り組んでいます。

しかし、主要業務の一つである、群馬オリジナル蚕品種等の安定的な蚕種製造に関しては、蚕糸技術センターの老朽化した蚕室^{※2}の能力（温度制御、飼育規模）では、猛暑等の厳しい気象条件への対応が厳しい状況です。さらに、稚蚕共同飼育所では、蚕室が分離できないため、複数品種を一緒に飼育した場合、作業体系が複雑化し、蚕の成育が不安定となることが懸念されます。これらの課題に対応するには、蚕糸技術センターにおいて、温度等の飼育環境が制御でき、複数の品種を分離して飼育できる蚕室を有する施設整備が必要です。

また、現在、労力削減や飼育期間の拡大が期待できる人工飼料育^{※3}について、3齢までの稚蚕飼育で行われていますが、繭生産量の増加に向けては、4齢以降も含めた全齢飼育まで対応できるよう、技術を確立することが課題であり、施設の整備にあたっては、その点も留意する必要があります。



蚕種製造（蛹の雌雄鑑別）



稚蚕人工飼料「くわのはな」

〈取組内容〉

- ① 蚕糸業の振興を図るとともに、新たな養蚕経営が展開できるよう、他の研究機関や民間企業等と連携した新技術の研究開発を行います。
- ② 有機ＪＡＳに沿った桑園管理や有機繭生産に適合した防除等、有機養蚕技術体系の確立を図ります。
- ③ 蚕種製造を行う各種施設を整備し、蚕種製造における全齢人工飼料育の導入や稚蚕人工飼料育の技術再構築を図ることで、蚕糸業の土台を強化します。



低コスト人工飼料による全齢人工飼料育



有機桑園の造成

〈指標〉

目標指標	単位	R 6 年基準年度	R 12 年目標年度
【蚕糸技術センター】 ぐんま農業新技術※ ⁴ の件数 (R 8 年からの累計)	件	1	5

※¹群馬県稚蚕人工飼料センターで蚕の餌として、桑や大豆粉末等で製造する人工飼料の名称。
稚蚕（１齢から３齢まで）の飼育に人工飼料を利用することで、養蚕農家の労力削減や（飼料の品質が安定しているため）繭の作柄の向上が期待できます。

※²蚕を飼う部屋

※³人工飼料を使用した蚕の飼育

※⁴群馬県の試験研究機関で開発された新技術のうち、生産性や品質の向上等の改善効果等に優れ、生産者等に直ちに技術移転できる内容を有すると認められた技術

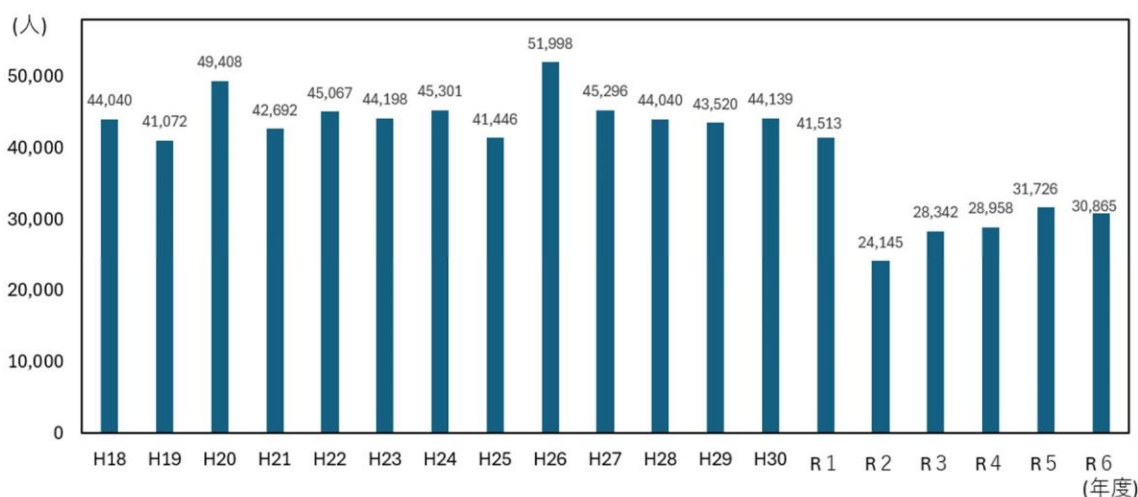
取組方向 6 蚕糸絹業の交流と情報発信

〈現状と課題〉

群馬県立日本絹の里（以下「日本絹の里」）は、平成 10 年 4 月、蚕糸と絹に関する県民への理解を深め、蚕糸絹業関係者の交流と蚕糸業振興の拠点、情報発信の場として開館しました。平成 18 年 4 月からは指定管理者による管理運営が行われています。

世界遺産「富岡製糸場と絹遺産群」や繭・生糸の生産等の蚕糸絹業に関する資料等を紹介する「常設展示」、蚕糸技術や染織作家等の様々なテーマを設定した「企画展示」、蚕糸絹業に関する「講演会」、絹の需要拡大を図るための「イベント」等を開催しています。さらに、繭クラフトの制作や蚕の飼育等の「体験学習」も数多く実施しています。これらの取組を通じて、子どもから大人まで幅広い人々を対象として、伝統ある本県の蚕糸・絹業の足跡と天然繊維である絹のすばらしさの理解促進を図るとともに、絹文化と蚕糸技術の継承などの重要性を未来に向けて発信しています。

日本絹の里の施設利用者数は、新型コロナウイルスの感染症対策の一環として臨時休館等を実施した影響により、令和元年度 41,513 人から令和 2 年度 24,145 人へと減少しました。その後も減少が回復しておらず、目標施設利用者数 47,000 人に対して、令和 6 年度は 30,865 人という状況です。施設利用者数の増加に向けて、広報活動の強化や新たな集客増に向けた取組を進めることが重要です。



日本絹の里年間施設利用者数の推移

〈取組内容〉

- ① 蚕糸絹業の情報発信の拠点である日本絹の里の施設利用者数を増やすため、魅力あふれる展示やSNS等の工夫を凝らしたPR活動を行います。
- ② 本県の蚕糸絹業の歴史や魅力を未来へ継承するため、特に、次世代を担う小学生に対して、学校教育を通じた理解促進と利用拡大の取組を強化します。
- ③ 日本絹の里シルクショップ内に、「ぐんまシルク認定製品」を集めたコーナーを設置し、県産シルク商品のPRや販売促進を行います。



日本絹の里 外観



企画展示室 糸かけアート



小学生の団体



シルクショップ

〈指標〉

目標指標	単位	R 6 年基準年度	R12 年目標年度
日本絹の里年間施設利用者数	人	30,865	47,000

群馬県蚕糸振興計画

問い合わせ先

- ・群馬県農政部蚕糸特産課

TEL 027-226-3092（蚕糸特産係）

- ・群馬県蚕糸技術センター

TEL 027-251-5145